切腹ピストルズ
日本江戸化計画

2017年5月 橋の下世界音楽祭

切腹ピストルズ・隊長／飯田団紅インタビュー

インタビュー　服塚光晃

―いきなりですが、切腹ピストルズにとって、橋の下世界音楽祭って特別ですか？

ある日、愛知県は豊田の男伊達「タートルアイランド」の一人、竜巻太郎氏と出会います。彼のやっている別のバンドと共演したときかな。「橋の下でやるお祭り」の構想を聞かされるわけです。「絶対合うから出ないか？」と。そもそも昔々のその昔、「本来の橋の下」という場所は、何かに属してないような人、世の中からはじき出されたり、自ら飛び出した人・・・などが集まる場所。そこから大道芸や歌舞伎なんかの祖型が生まれる。芸事というのは皆、橋の下から始まったようなもので。そのルーツを今一度意識して、橋の下っ側から世の中を眺めてみる・・・そんな祭りをやりたいんだと。てなことで第一回目から「橋の下世界音楽祭」に呼んでもらえるわけです。俺は最初、「橋の下って三条河原みたいな」のを想像をしてたんだけど、思った以上にでかい橋。馬鹿でかい橋の死角は凄くて、勿論「フェス」というより「お祭り」です。日本地図上の位置もいい。愛知県・豊田という場所だったからこそ、東西南北から人が集まる。これはもう地政学です。嗅覚ある奴らが四方から集まってくる。で、ソコで体感したことをソレソレが郷に持ち帰る。音楽はもとより、祭りや昔のものが好きな奴、普段、世の中にハテナがある奴らに話が回る。だからそれまで切腹ピストルズは細々とやってたんだけど、豊田・橋の下に出てから我らを知ってくれる人たちが一気に増えた。まさに僕らが育った場所ともいえますね。はい、特別です。

それと、宮内庁で雅楽の演奏している神主さんに教えられたことがありますが、大切なのは一年に一回必ずここでやるという場所を持つことだと言うんですね。例えば、雅楽の人たちも国立劇場で毎年決まった公演に向けて本気で練習したり、新しい曲をまとめたりすると。芸事は「ここ」という決まった場に向けて精度が上がっていくと言われまして、そういうのを大事にしなさいと言うわけです。ちなみにそれはニホンオオカミ信仰の総本山の一つ、武蔵御嶽神社の方から言われました。なるほど本当にそうだなと思います。去年の橋の下はこうだった、今年はこうしてやろう、曲をひとつこしらえようとか、ここを変えちゃおうとか考え出すわけです。「橋の下」は僕らにとってそういう思いにしてくれる場所であります。

―橋の下世界音楽祭は豊田大橋の下に江戸の町が三日間だけ現れて、祭りが終わると幻のように消えるという印象ですが、あの江戸の感じって、最初からそうでしたか？

「江戸」の感じは最初から。タートルアイランドがそういうの好きでしょうし、あのあたりは農村歌舞伎、地歌舞伎なんかが残っていたからとかあるのかな。初回から原っぱで歌舞伎もやってた。手作りで泥臭くて昔の建築、佇まいのものがずらっと並んでました。それを、江戸だと言い切ってたかどうかはわからないけど、自分らでつくるとそういう物になるのでしょう。アウトドアのテントじゃない。そもそも町とはなんだろう？　そうそう彼らは町を作ると言ってましたね。思い馳せるとああいうふうになっていくんだと思います。例えば、今年の橋の下でも鍛冶屋さんがいましたけど、鍛冶屋さんも、もちろん昔は町や村の中にあったりしたわけです。それらをもう一回現代に連れてこようとさかのぼるとその雰囲気は江戸時代に繋がっている。しかもそういう鍛冶屋さんが生き残ってるんですよ。確かに祭りが終わると町は幻のように消えるけど、そこでの体験は「住んだ」実感になるんですよね。これは非常に大事な事です。

―もともと切腹ピストルズは、和楽器じゃなかった。そもそも、どういう経緯で今のスタイルが確立されたんですか？

きっと長くなりますがかいつまんで言うと、30代ちょっとまでは、ほとんどパンクのことしか考えてない。そんなある時、ロシア生まれの19歳の娘と出会って、面白くてそれ以来一緒に行動します。その子が、その昔セックスピストルズが初ライブをやったロンドンの「セント・マーティンス」(Central Saint Martins)に進学するってんで、野次馬根性でノコノコ着いてった。住むとこもままならないロンドンの道端で勝手に絵や服を売ったりの底辺生活。いろんな場所や人と交流している中で、いくつか強く気づいたことがでてくる。「国や政府なんかどうでもいい」と言う人らともいっぱい会うわけだけど、そんな奴らも「あそこの建物には、昔、思想家の誰々が住んでた」とか「今のうちの部屋の上にあの作家が住んでた」とか誇らしく言ってくる。「見、昔なんて知らねー!今俺たちが生きてりゃ充分！　なんて言いそうな奴らなのにね。　偏見か(笑)。次、例え話ね。日本人にとって「パンク」と「テニス」って結びつかないでしょ？　でもロンドンのパンクの奴らは、パンクの中にテニスが含まれてたりするわけ。セックスピストルズ周辺の人とも会った。現地の奴じゃないと解らないさじ加減っつーか、事情から出たスタイルを感じまして。個人の趣味というより土着の何かがあって始まってる。でまあ、ロシアやウクライナを回って運良く日本に戻れることになり、空港から都内に向かう久しぶりの日本の景色が、プレハブみたいに見えた。なんの計画もなしにとりあえず建てちゃったみたいな町並み・・・最新ねらってダサい変な家とか「何じゃこれは!?」と。ひどい有様になってるなと。僕は「東京め!」みたいな事を言ってますけど、東京生まれ東京育ちです。そいつが悲しきかな因縁をつけてる。哀れでしょう？　東京だけじゃありません、世の中なんでこんなになっちゃったの！　と日本とか歴史とか時代に翻弄された人々を可愛そうに思えちゃった。それがまず大きな気持ち。そして逆に日本探しに興味が出てきた。

―ライブの場は、音楽なんだけど音楽だけじゃない、もっと大きいうねりのような何かがあの場にある気がするんですが、なぜでしょう？

本当にアーティストのつもりなんか一切ないんで申し訳なくて。演者と客との境界が曖昧だとソコに何か感じますよね。そこが重要。はたまた、普段から野良着や袢纏で動いてると、通りすがりのおばちゃんに「何かあるの?」「今日、お祭り?」と聞かれるんだけど、こっちの格好が普通だと思ってるんで、煙草くわえてたら「あなたJTの人?」って聞かれてるぐらい困ります。

―切腹ピストルズは「反近代」をスローガンに掲げたり、ストレートなメッセージをいろいろな方法で世に打ち出していますが。飯田さんが伝えたいことは何ですか？

和楽器だけになる前は、自分らを「ポップ右翼」という言い方をしてました。かっこいいセンスある右翼って意味です(笑)。でさっきも言いましたが日本の近代史や歴史問題をさかのぼって行く曲をやってました。出てくるモチーフも野村秋介氏や三島由紀夫氏だったり、尖閣諸島やCIA、真珠湾奇襲だったり、で江戸時代までさかのぼるつもりで。しかし繰り返しになりますが予定は早まったわけです。もはや「反近代」を言い始めました。世間さまが、時代や世の中を問題視するとき、だいたい戦前、戦中、戦後そういう切り口で語ることが多いでしょ。でも、明治維新あたりから「日本が破壊された」でしょう！　丁寧に言うと明治維新から選んできた美意識が今もなお問題だなと感じています。いろんな人が認めてる「近代」というのは本当にこれでいいのか、古くさい単語ですが「反近代」をご近所の言葉にしたほうがいいだろうと。つぅわけでキーワードをばら撒いてます。なんであの人たちは反近代と言っているのか？　がスタート。「反近代をどり」という曲があります。橋の下ではよくやりますね。「反近代～をどりっ、ぁソレ」というだけでだ進んでいく曲。歌詞はそれだけ。それ終わるとみんな、口ずさんでる。数日後に鼻歌で出てくる。そのためだけにやっている曲です(笑)。理屈は僕もまとめきれていない。まとめる頭もないんですけど、近代化の流れの中で、世の中がおかしいんじゃないのか？　を単語にしたら単刀直入「反近代」。「新近代」でもいいんですけどね。

明治維新は慌てんぼうです。

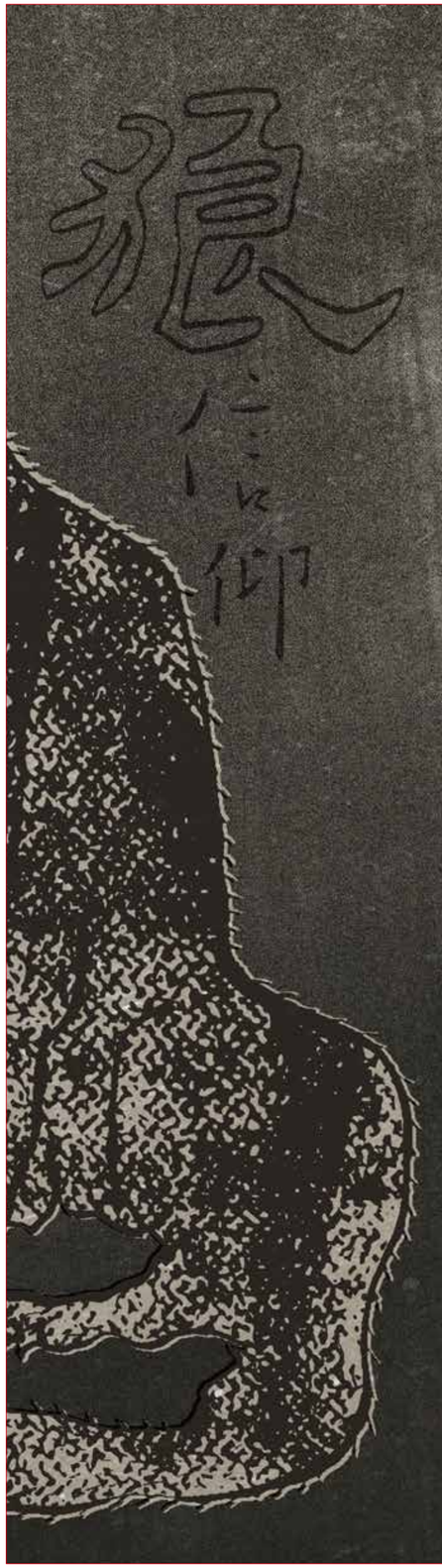
「近代国家として認められるためには」「文化的なものが揃ってないと猿と呼ばれるぞ」「裸足はやめろ」「とりあえず我が国の近代を見繕って来い」ということで準備不足のプレゼンへ向けたでっちあげ資料みたいなのをどんどん作ります。第1回プレゼンはなんとか乗り切れたけど、また来週つづきをと言われる。で、次、次、とプロジェクトはどんどん進む。最初はこんなことやりたかったわけじゃないんだけどな…と思ったまま、ずっとプレゼンをやらされている。偉い人や大金も動く、家族も絡んでたりするから「そもそも」を言い出せなくなる。もはや性格や日常となる。戦争になって戦争が終わって、今度の新商品は経済大国です…という流れでバブル前振りで原発事故を起こしちゃう。でもまだ続けてる。慌てたプレゼン、まだまだできます的な感じで続けて、それで今に至る。百歩譲ってそれらが自分らで主導権を握るまでの時間稼ぎ部隊だとしましょう。だとしたら庶民が本質をまとめなきゃいけない。選ぶのはてめぇ自身がいい。僕は江戸時代に戻せというより、いや戻ってもかまいませんけど、慌てた明治維新でこぼれ落ちたり抹殺されたものをイカした奴らがちゃんと見直して、もう一回取捨選択やり直したほうがいいんじゃないかと確信してます。

―日本の姿を、外からの目線で捉えられるようになったと？

よく、海外に出て初めて日本の良さがわかったとか聞きますけど、そういう愛着ってよりは、日本が可愛そう…という気持ちだった。何様だって思います(笑)。帰国してから住むところもなしで寮付き車工場に直行、大きい声じゃ言えない仕事までやりまして。しかし日本探しは続き、右翼の会合も潜り込んだし、「歴史を学ぼう」「古典芸能」…の張り紙なんて以前はゴミの収集日のお知らせと同じようなレベルで見ていたのに、日本探しが始まったらそんな貼紙がたくさん目に入ってくる。で、実際足を運んでみた。面白ぇ概念の塊だらけでした。それを仲間で共有するようになった。俺が恵まれてるのは、そういう俺の気まぐれや心境につきあってくれる仲間がいることなんです。

人生初、就職しましたが、ありがちですが募集要項とは真逆の帰れず寝れず狂った者勝ちで、同僚がどんどんいなくなるような「うーん、3年経ったら辞めよう」…沸々悶々と過ごします。さて、3年たった！　瞬間に辞表、明日から自由だ！　ということになりました。忘れかけてた己の時間とは何か？　を考えました。なぜか時間を思い切りドブに捨てることこそ「純度の高い俺の時間!」だと思いまして、知識がないとまるで面白くなさそうな、もしくは「笑点」の延長だろ？　な、お決まりのあれ「寄席・落語」に照準を合わせたのです。平日昼間から寄席にいるロクデナシの感じで金と時間と人生をドブに捨てよう、これが一番の自由だ!と浅草演芸ホールに行くんです。昼の開場と同時に入り、観始めて30分で「感動」しその場に土下座です。夜の9時の最後まで観て、出るやいなや仲間十数人に「1か月後の文化の日までに一人ひとつ古典落語を覚えるべし」と通達を出します。「この国に育ってるなりに、知恵を使って何となく落語ぐらいできろ」と。そして予告通りの落語会当日、オレが一番面白いからトリだとふんぞり返ってたら、前座の単細胞で酔っ払うとタチ悪いだけの与太郎素朴バカな仲間が一番落語がうまかった。その日、仲間内の上下関係がひっくり返りました。その与太郎、今や切腹ピストルズの隊員でもある「志むら」って奴ですが、その日から落語の時は志むらを師匠と呼ぶことになります。すぐの年末、忘年会で再び落語をやろうと言うことになって、なぜだか六畳二間に知らない人までワイワイ聴きに来ちゃって40～50人。その中に福住廉(ふくずみれん)という人物がいたんです。なんで落語やっているんだろうと思って来た。彼が研究していたのが哲学者・鶴見俊輔氏が提唱していた「限界芸術」という思想でした。明治になって切り捨てられちゃった、生活の中に存在していた芸や術。近代からは芸術とされていないけど、本来日本が伸ばさなきゃいけなかった文化があった。それを研究してるのが福住さん。何かを感じてくれたらしく公の場で俺たちに寄席をやらせたり。それが2009年、2010年あたり。

ふぅ、さて、それまでもずっとパンクバンドはやってまして、エレキのギター、ベースにドラム、色々な録音した音を乗っけて流して只暴れて歴史問題に触れる曲をやってました。お囃子や民謡なんかもサンプリングしてそれが曲調になってて、50歳とか60歳になる頃には、全部和楽器でやりたいなぁとかよく言ってました。和楽器ってぇのはジジババのこれがまたかっこいいんで。そしたら、あの東日本大震災がきた。原発も爆発した。何ができるのか、表現者はどうするべきなのか、電気が足りる足りないとか、世間では色々飛び交ってる。俺たち難しいことヌキに「今こそ!」って感じですべて和楽器にしようとなった。計画がかなり早まった。しかも停電でもドンダカドンダカ鳴ってるなんてざまぁ！　と。阿波踊りは高円寺に住んでた時から好きだったし、久坂くんはやってた。高円寺にあった阿波踊りの店で和楽器を勢いだけで買っちゃいます。まだメンバー 4人。久坂、太一の平太鼓ふたり、鉦が俺、元ギターの寿ん三は三味線。構想はあるがまるで何もできない。できないけどやり始めようと。放射能のほうが大変らしいから太鼓だったら放射能ぐらい消せるんじゃねえかと言って、楽器持って福島原発20キロギリギリのところまで行くんです。何も出来ないのに「バカやろー!」って叫んで、カンカンドコドコやって「よし除染完了、次!」みたいな(笑)。和楽器だけにしたのはそっからです。東日本大震災とともに。で、和楽器、太鼓や鐘の音というのはすごいなと思った。太鼓や鉦で「ドカン」その一発だけで、これをやりたかったんじゃねぇのかなと本当に思いました。この体制になったらなったで、それを無意識にも待ってた奴らが実は結構いたわけです。我々は演者というよりは、和楽器ってなんでこんな気持ちにさせやがるの？　を見せてるだけです。あと瀬戸内で海賊の真似して船に乗って演奏しながら港に現れるってのをやってると、港で聴いている人たちは、一番遠くからまず笛の音が聞こえてくる、その次に鉦が聞こえだし、ずいぶん近づいて太鼓がドンドコドンドコ聞こえてくると言われます。当の俺たちは、でかい太鼓と鉦の音ばっかりで笛なんかまるで聞こえない時でも、遠くでは笛が聞こえてる…不思議で、とにかくつくづくかっこいいと(笑)



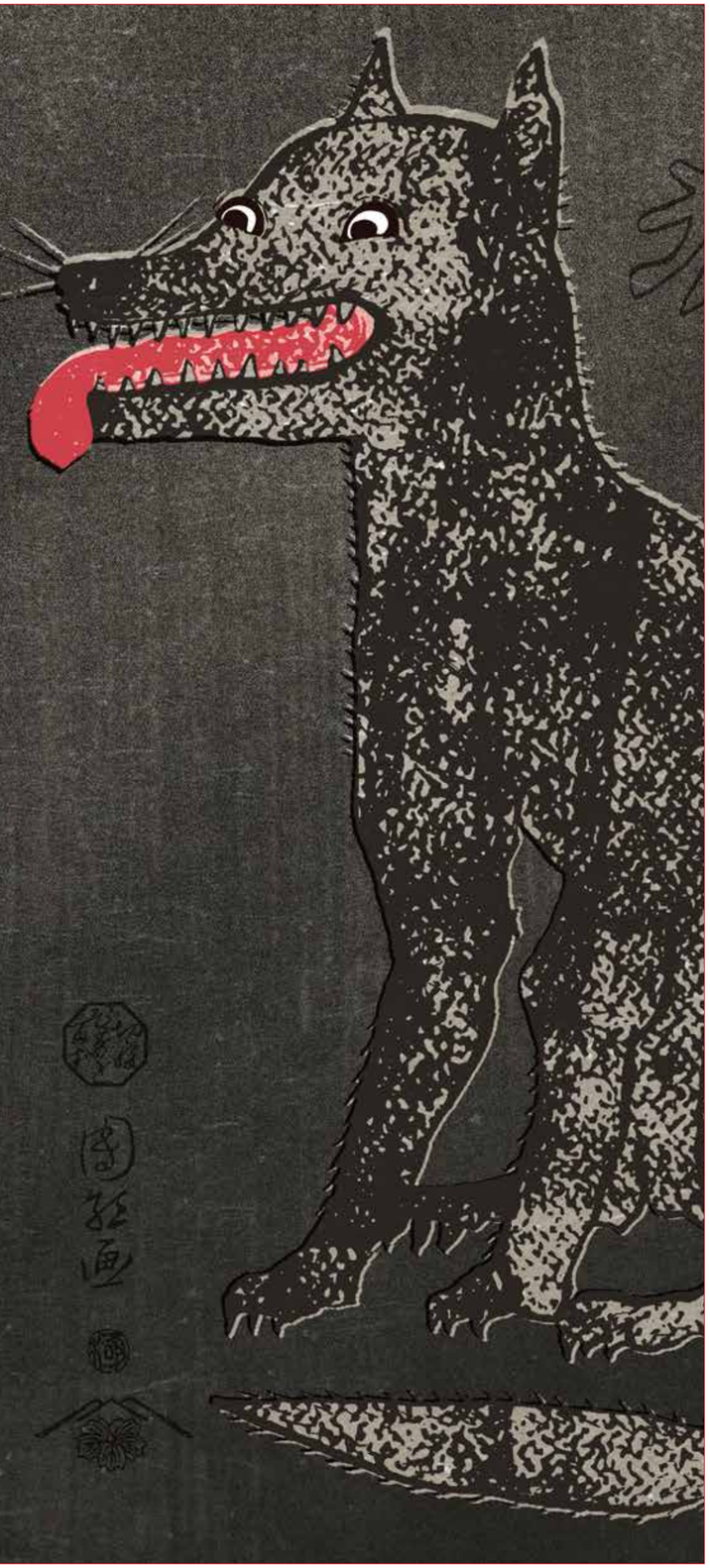
—一時的には満たされるけど、国家に飼われている感じというか。自分から動いていない。だから魂が動いていない。その辺が江戸と近代の違いじゃないかと思うんですがどうですか？

世の中どうあるべきか？　で変えていく…これは難しい。世の中いろいろな人がいる（笑）。パンク育ちの自分も含めて理性的に動ける人ばかりじゃないです。こうあるべきだといってストイックを求めても無理。それよりは、ロクデナシでも生きられるようなシステムがないかということを馬鹿みたいに考えているわけです。よく、江戸時代はエコだったという切り口が必ず出てきます。しかし、杉浦日向子さんの本にも出てきますが、当時、夜の橋のところに四文屋（しもんや）の屋台なんかが出てて、客は食った串焼きの串をぽいぽい捨てているわけですよ。串は捨てているわ、べタベタの手は橋の欄干で拭く。鼻かんだ紙もぽいと道に捨てちゃう。ポイ捨てしまくっているわけです。では、なぜエコだったか。別に世の中きれいなほうがいいよね、ということだけでゴミを拾ってただけじゃない。食い扶持を見つけるためにゴミを拾ってたわけでしょう。大して理性的に動いてないのになぜエコ社会なのか。これは、物の素材だと思うんですよ。捨てても問題ない素材。使い回し・工夫しやすい素材。理性的に考えず個人的に動いても致命的にならないためにはきっと素材なんです。紙とか竹串とか。偶然、江戸時代はそう出来ていた。ポイ捨てをしても大丈夫、やっぱり竹ってラクだよ、みたいな。この考え方で色々あてはめて模索中です。あと強敵なのは、成り上がりたいイケイケの人たちが高層ビルやキラキラを手放せるかどうか。できないでしょ。はたまた企業はCMとかでライフスタイルや美意識を提示してきますが、見てるほうはそれを半分茶化しながら、乗っかっていきます。おれたちもやってみようぜと。「おっけーぐーぐる」なんちゃってみたいに言いつつ実行する流れです。そのシステムはろくでなしでも大丈夫なのかなぁと。とにもかくにも俺の奥底には言えないぐらいの呪いが渦巻いてるので気をつけてください。

—理想を語っていただいたわけですけど、まだまだ私たち現代人は江戸人の人生観を知らないのが現状ですよね？

百物語というのがありますね。不思議な話ばかり。杉浦日向子さんも百物語で3巻くらい出していますけど、昔の日本にあった不思議な話というのを改めて読んだりすると、かなり概念を変えられちゃう。今どきの怖い話って、なるほどね、という理由があるんですよ。しかし百物語、その中のひとつを例にすると、夜、家に帰ろうと歩いている。墓地を通り過ぎると墓石をみがいている変なのに会う。怖いから走って家に帰ると、娘の歯が黒く染まってた。終わり（笑）。理由なんかわかんないですよ、だって不思議なんだから。あそこは行かないほうがいい、以上。

最近知ったことで言うと、昔の日本人というのは、空中に字を書いたら、必ず手で消すという動作が含まれてたらしいです。全国的かどうか分からないですけど、昔の日本人の所作の中にそういうのがある。それがあったら日常がいじらしいというか、美しいでしょ。当時の人たちには別の概念・感覚があるんです。寂しいから別人とは言いたくはないですが、狂おしいくらいの感覚、概念で物事を見ていた人たちで、それを楽しんでいた。しかもセンスを感じて羨ましくてしょうがないです。理屈化されてない、アートと言い換えない。怖い話も起承転結なく成り立っている。世の中ジャンル分けできないものがいっぱいあって、本来はそうしたところまで含めて文化だと思うんです。随分絶滅してきたのではないでしょうか。自然淘汰だと思いますか？　人為淘汰だと思います。それらはだいたい面白いんで、掘り起こしたら世間にならべていきたい。



—切腹ピストルズは、ニホンオオカミをプリントしたTシャツを作られていますよね？

Tシャツ、西洋肌着ですね（笑）。そう、我々は勝手にニホンオオカミをシンボルだと思ってます。最後のニホンオオカミは、明治の後半につかまって殺されたといわれてますが、狂犬病が外から入って来て、オオカミにも伝染して、人を噛んだら危険だからと物理的に殺していったり、自然がどんどん壊されていく中で死んじゃった。秩父でニホンオオカミを追い続けている人は、オオカミ見かけて、あれはなんだろうと、ずっと追ってます。

ニホンオオカミは見栄えが魔物みたいですよね、ウルフと比べると（笑）。キツネと犬と妖怪を掛け合わせたみたいな。その妖怪的な、魔物的な感じも日本らしい。そんなオオカミの信仰ってのもいいでしょ。そんなところから興味が出たんですよね。単純に、かっこいい、山奥にいそうだ。御札もいい。デザインに使ったのは東京の御嶽神社の御札のオオカミ、お犬さまです。

俺が移住した栃木で、地域の民間信仰を本で調べたら、住んでる町にも狼信仰が伝わってた。やってる一族があると。話を聞きにその一族の人んちへ伺いました。いきなり神棚に三峰の御札なんかが下がってる。うひょーですよ。一年に1回、村の代表者が秩父まで行って御札をもらう「三峯講」ってのをやっていて、今では皆が歳取ったから車で御札をもらいに行ったり、送ってもらったりなんですけど、未だに毎月決まった日には、山の入口に灯籠みたいなところがあって交代で蝋燭灯すのを続けている。とにかく秩父への旅の道中の話が面白くて、昔は、秩父まで歩いたり、自転車で行ったと。途中で羽目外したりとか、飲んだり食ったり。三峰もそんな感じで、俗的なものと神聖なものが同居していて、中野さんも三峯神社でお祓いしてもらいながら酒我慢してて、終わったらどんちゃん騒ぎ。長い道のり帰ってきて、村の人に三峰もらってきたからよと。江戸時代の○○講もそんなんですよね、

橋の下世界音楽祭に来てるジャイアントステップという大きな髑髏や鬼の人形を操る集団におじちゃんがいて、昔、疎開で栃木に来ていた時に、犬でもなくてキツネでもない。遠吠えが聞こえて、怖いなと思ったらそれが出てきたと。オオカミを見たというと馬鹿にされるからいつか言わなくなったらしいんですが、僕らがオオカミ、オオカミと言っていたら、実は見たことあるんだとカミングアウトされました。御嶽神社の神主さんも、ニホンオオカミを追っている人も言っていましたけど、諦めると、いなくなっちゃうんですって。俺にも理屈のない自信があります。近い将来ひょっこり出てくるんじゃないかと思ってる。福島の飯舘村に山津見神社という神社があって、ここもオオカミで有名なとこです。放射能が飯舘村へガーッといったときに、放射能汚染が止まったのが山津見神社と言われています。**ざまあみろ。**

—目に見えないものって絶対ありますよね。その見えないものを許さなくなったのが近代の世の中。今こそ近代、現代について江戸を踏まえた上で価値観を見直すいい機会な気がしているんです。

うちの隊員の野中の受け売りですが、江戸時代までの尺八というのは、ドレミファソラシドがない、意識していないんですね。切った竹にいくつか穴を開けて吹く。竹の中もそのままなので音を出すのが大変だから、竹に合わせて音が出るように修業する。江戸時代の江戸尺八です。それをやっていたのに虚無僧がいるんですけど、この虚無僧というのが得体の知れない人らで、禅の修業しながら旅をしている。徳川家康の書いた「虚無僧は関所を通してやるべし」みたいな書面を持ってて、関所をバンバン通過する。その原本、実は虚無僧が勝手に作った疑惑もあって、しかしその流浪していた虚無僧、何してたんでしょうね。修行していない人もいっぱいいたらしいです。ほかにも、通行手形は関所の近くの旅籠で安く売ってたというのを最近知りました。厳格と緩さ、矛盾が同居したこれらは何なんでしょう。

これ言ったら野暮だから本来言わないことですが、建前上だけ厳しいって事ないですか？　そうやって志あるやつだけが乗り越えられるようになってるみたいな。現代はみんなその建前にやられちゃうようになります。実は、絶体絶命の時にも裏道がある、痛快ってやつですね。

昔はこうこうせねばならないと言われたら、はいはい分かりました、ばーか、という不敵な自由があった。こういう浮世絵を売るのはけしからん！　とかと言ってる人が、裏で浮世絵師に春画を描かせたりね。あくまでも正規のルートを通る場合はダメ。絶妙なバランスの歩き方で物事が動いていた気がしてます。もしかしたら、外側に自由があったのではなく、人の中に「ちゃっかり自由」があったのかもしれないな。ただの図太さなのかも知れない。

切腹ピストルズ／せっぷくぴすとるず
『反近代』を旗印に、おもに和楽器による演奏で全国各地を練り歩く。日本各地に散らばる隊員はおよそ二十名。奉納演奏、村祭り、ライブハウス、デモ、芸術祭など、神出鬼没な演奏を得意とし、地方探索と研究、農、職人、寺子屋、落語など、隊員それぞれが展開している。その主張や野良着の風貌から「江戸へ導く装置」と呼ばれる。
●隊長は、飯田団紅

—今の都市には当たり前のように自然でないものが溢れていますね。江戸という町もある意味で都市だけど、すぐに手の届くちょうどいい具合に森や川などの自然があった。

「都市としての江戸」も面白い。が、今では「江戸時代」それを取り囲む地方、田舎の裏側までが気になります。行政レベルじゃなくて民間の感覚とか好奇心とか。あとは村を逃げ出した若者が諸国を行脚しているとか、旅や参勤交代、そういういきさつの中で、持ち帰ったり伝わったりで、皆で何かを始めるまでになる。町や都から何かを持ち帰って…と言うと、現代と同じだと捉える人がいるけど、決定的な違いがありますよ。「伝わる速度」です。ジワジワ伝わると土着的な変化を遂げる。

僕らが江戸江戸言っていると、じゃぁクーラーがなくてもいいのか、スマホ使ってるじゃないかとか、いろいろ言ってくるお門違いな奴がいるわけですが、解ってない奴だなと思いつつ、そういうクソがいるのも世の中でして（笑）天からのお題だと思ってる。インターネットで情報とかがどんどん飛び越えていくので世界はひとつ、国境がないみたいに思いがちですけど、ある日グーグルが「もうサービスやめまーす」とケツまくったらそれまで浮かれてた自分の居場所がはっきりするでしょう。明朝あたり覚悟しなさい。原発もそうだと思うんですよね。よくわからないものに身を任せてる。100％一方側に乗っかっちゃうのは情けない話しです。僕は東日本大震災の時、東京にいました。都内が騒いでるのは、帰宅難民、コンビニやガソリンスタンドは空っぽって事でした。「よくわからないけどきっと大丈夫」が集まってて、何かあるとどうにもならない、それが現代だと思います。一方ですでに大丈夫な生活を送ってる人々もいますね。

—情報コントロールされている文明社会に自分の全てをあずけるなってことですよね。そのためには江戸の価値観をそれぞれが噛み砕いて自分に必要な部分を取り入れるのがちょうどいいのかもしれませんね。最後に江戸についてなにか。

「江戸」と言った時、都市の江戸だけではもったいないですよ。その時代、ほぼすべてが地方です。全国のほとんどがお百姓です。そこまで含めて凄いことが眠っています。俺たちの普段着でもある野良着は、みんなの普段着でしたよ。さあ、みなさん、世界の流れがどうであろうと着々と準備を進めましょう。実はもうとっくに各地で始まっています。新江戸時代の登場です。

ご静聴ありがとうございます。